

ガラシアの憑き物は落ちた。試合は最終盤だが、ここからは正々堂々としたラグビーの試合だ。試合は弁天堂が僅差2点のリード。

ランポーからあかねへのパスを、ガラシアがインターセプト！鏡や風馬が向かうが、見事なステップでかわす。弁慶が立ちほだかるが、得意のジャンプで宙高く飛び、弁慶の頭に手をつけて踏み台にしてあっさりと抜いてしまった。ガラシア独走！

思わず、レズのみずほも「かっこいい…」とポツとしてしまうほど、惚れ惚れとする姿だ。そのままトライ！試衛館が再逆転。

解説者「ガラシア選手、動きがなめらかになりましたね。さっきまでのトゲトゲした感じがなくなって、何かがふっきれた様に見えます」

あかね「くっ…もう時間がねえぞ、急げっ！」

弁大は球をオープン展開したが、試衛館の果敢なタックルでモールとなってしまう。ここでボールを取られたらお終いだ。あかねはなんとかボールを拾うが、敵がすぐそこに！ウィングステップをする余裕もない。あかねはドロップゴールを狙った。決まった！これで、弁天堂 36-36 試衛館と同点。

あかね「ガラシア、今から試合のやり直しだ。残り時間からすると、あとワンプレーしか出来ねえだろう。ドロップゴール D G や ペナルティキック P K なんかのケチな得点争いはする気はねえ。真正面からトライをとってみせるぜ！」

ガラシア「いいでしょう…トライで決着をつけましょう！」

両者、トライで試合を決めることを約束し、プレー再開。ここからノーサイドまで、ノーホイッスルの凄まじい攻防が始まった！

弁慶がボールをもって猛突進するが、試衛館が3人がかりで止めた。弁慶はなんとか早池峰へパス。早池峰はタックルを受けながら土門へ。試衛館も果敢なタックルで、土門はボールを離してしまったが、こぼれ球をすかさず鏡が拾う。これも素早く試衛館がつぶしにくるが、なんとかあかねにつないだ！凄まじいまでのトライへの執念だ。両チーム一進一退の攻防、客席も息を呑んでいる。

あかねが走る。ゴール手前に3人の試衛館選手。あかねは、一気にウィングステップでトライを狙いに行った！

だが、あかねの後ろにはガラシアがマークでついてきていた。あかねの跳躍にあわせて、ガラシアもピッタリと跳んできた。またしてもウィングステップは止められてしまった。

監督「いかん…あかねには、ガラシアがべったりとマークしとるで、いかんわ…」

これをみたまずほから、喝が入った。



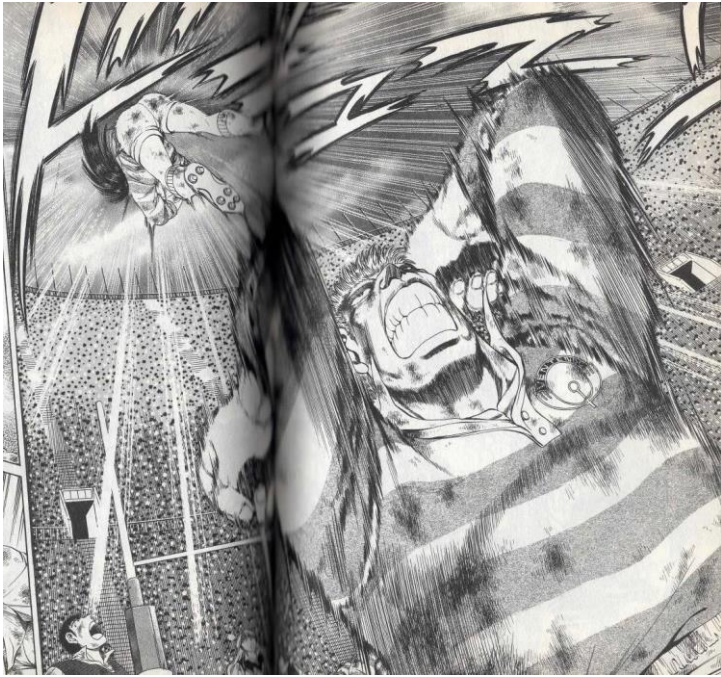
ウィングステップが通用しなくなった弁天堂はどうすればいいのか……。

敵陣 22m ライン上で、弁天堂大学ボールのスクラム。ここで弁慶が No.8 のポジションに入った！

あかね「W・Sを封じられた今、^{非大}ウチにはこれしかねえんだ！！」

あかね自身がボールイン。そして、フッキングされたボールをあかねが持ち、あかねは弁慶の両手に飛び乗った！

あかね「ベンケイ！」



出たー！弁慶のあかね投げ！！！！結局、最後はこれ（笑）。やっぱり弁慶は、ウイングステップすらも超越するゲームバランスクラッシャーであるという見立ては間違いではなかった。もう、毎回これやればいいじゃん。

それに、これで試合を決めるなら、先ほどのみずほの喝は無意味なような・・・パンツ見せたかっただけ？

ガラシアは味方の背中を台にして、自らも空中へ飛び、あかねを止めようとした。こちらも凄まじい執念だ。



しかし、踏ん張りのきかない空中では勢いを殺しきることはできなかった。あかね、ガラシア両者はもつれあいながら、インゴールへ落下。トライ！！逆転！

ゴールキックを終えたところで、ノーサイドのホイッスル！！弁天堂大学が大逆転劇で優勝を決めた！！大いに盛り上がる観客、そして監督達。

刑事「クロアチア陸軍中尉 ガラシア・リトバルスキーだな。連続障害及び病院爆破の疑いで逮捕する！」

ガラシア達は手錠をかけられて去っていった。去り際にガラシアはあかねに声をかけた。

ガラシア「一連の犯行は、確かに我々がやったことだが・・・私の名は細川・・・細川ガラシアだ！」

リトバルスキーではなく、細川の苗字を名乗った。遠のいていくガラシアに対して、あかね「ガラシア！」

あかねからも声をかけた。ガラシアが振り向く。

あかね「シーユーアゲイン！」

ガラシアも微笑み、手錠のかかった手をあげて応えた。

ガラシア「シーユーアゲイン！」

さわやかなノーサイドだ。全国大学ラグビー選手権大会優勝・・・弁天堂大学！！

あかね（勇二）はついに悲願を達成した。

大学選手権優勝を決めた弁天堂大学ラグビー部。祝賀会を開いている。宴もたけなわだ。

監督「くう〜っ、弁大ラグビー部創部から苦節 12 年…やれクズだ、大学の恥だのと言われ続けてついに…ついに大学の頂点の昇りつめたんだがや〜っ！！」

泣き上戸の監督、優勝旗をハンカチ代わりに使用するなど、はちゃめちゃだ。あまりにも泣きすぎて、みずほの膝枕で泣く始末。

みずほは、嫌がるかと思われたが…自分の膝で「おんおん」と泣く監督を見て、なにやら母性本能がくすぐられたようだった。合宿で男嫌いを克服した成果か。

あかねと早池峰はトイレに立った。二人きりで話す。

早池峰「お前…いつまでその体に留まっているつもりだ？大学選手権が終わったら、その体をあかねに返すという約束は忘れてねえだろうな！？」

もちろん、あかねは忘れていなかった。3 日後に勇二パパから蘇生実験を行なうという連絡があったこと、それに 2 年も経って選手権優勝までして思い残すことはないという。

あかね「あとは、東大の研究室にある俺の体に戻って、お前達もそれぞれの体に戻れば万々歳という訳なんだが…」

そこへ、久しぶりに爺さんキター！

爺さん「そうはうまくいかんかもしれんぞ…実は、霊界の管理人がえらく御立腹でのう…」

そして、霊界の管理人、すなわち**死神が本当に現れた**。



こんな感じなんですか！？丸眼鏡かけて…。

だが、死神のおじさんは、今回はあかね達を連れに来たのではなく、別件だという。

死神「あ、もうそろそろですね」

そこへ、栗果が駆け込んできた。早池峰の祖母が倒れたという一報が入ったのだ！すぐに病院へ行こうというあかねに対し、早池峰は若干の抵抗をみせたが、あかねは強引に連れて行った。

病院の ICU に着くと、ヤクザの婆さんが酸素マスクにつながれていた。

部下ヤクザ「トイレで倒れられて…心不全だそうです。大姐さん…いや総長代行は、明さんが一日も早く三代目を継いでくれることだけを口ぐぜのように言ってましたぜ…」

ついに、早池峰は自分の思いをぶちまけた。

早池峰「ケッ！ガキの頃から三代目三代目って…ババアにとっちゃ俺は家名を守る道具としか見ちゃいねえのさ。オモチャなんか買ってもらったこともない。ハジキやドスばかりで、ゲームも花札・マージャンの類。同級生なんかと話が合うわけねえよな。家がヤクザだし、いつも俺はひとりぼっち…気がついたら、その手の連中とばかりつきあうようになってたよ。美雀会なんぞ、いっそなくなっちゃったほうがいいのさ！」

この声をきき、婆さんは息も絶え絶えに応えた。

婆さん「あ…き…ら。…さ、三代目なんぞどうでもええ。お前の好きな道に進むがいいさ！！美雀会は…私で店閉まいだ」

部下達は涙した。

早池峰「くそつたれー！」

早池峰は病室を掛け出て行く。それを栗果が追ってきた。

早池峰「来るな！今の俺は、お前をメチャクチャにしちまうかもしれねえんだ！」

だが、栗果は早池峰の後ろからそっと抱きつくと、

栗果「いいよ、メチャクチャにして…私も先輩と同じだったのよ。いつもひとりぼっちで…同じフィーリングを感じたからかな。好きになっちゃったのは…先輩の気持ちがおさまるんなら、私何されてもいいよ」

と告白した。ビッチめが。もう一度、謹賀新年やれや。

婆さんは、いよいよ最期を迎えようとしていた。爺さんの霊が、横たわる婆さんの上にやってくる。

爺さん「チヨさん、迎えに来たよ」

婆さんの霊が、肉体から離脱した。爺さんを見て驚く婆さん。

爺さん「ワシじゃよ。森山もりやまとみいち富市じゃ」

婆さんはハッと気づいた。爺さんは50年間、ずっと婆さんを見続けていたという。

婆さん「富市さ…ん」

そこへ、何かを感じたあかねが病室に入ってきた。二人の霊が居合わせていることに驚くあかね。

爺さん「ワシとチヨさんは、50年前、許婚いいなづけの間柄だったんじゃよ」

そして、爺さんは昔話をした。太平洋戦争の末期、挙式を目前にして富市は招集を受け、出征することになった。万歳三唱をうけながら、列車に乗り込む富市。チヨさんは見当たらなかったが、列車が走り出すと、追いかけてくる女性が。チヨさんだ！チヨさんは、富市に走りながら、毘沙門天王のお守りを渡した。だが、それが顔をみる最後となった。それから1年後に、富市はビルマで戦死。チヨさんは、富市の死を知った3年後に、美雀会

の初代会長と結婚したというのがいきさつだ。

あかね「そうか…・…じじいがこの世に残した未練というのはバアさんへの想いだったのか」
顔を赤らめる爺さんであった。

死神が迎えに来た。

あかね「ちょ、ちょっと待ってくれ！あと1時間…・…いや、30分でいい！」

その頃、早池峰と栗果は、まぐわっていた。一戦終えて息をつく。

栗果「ねえ私、ヤクザ屋さんの奥さんになれるかな？大学理事長の娘が、暴力団の組長の妻…・…チョーカッコよくない！？」

早池峰「ふふ…・…いいかしんねエ」

そこへ電話が来た。婆さん危篤の電話だ。これを受けて、早池峰と栗果は病院に舞い戻ってきた。二人が病室に入ると、婆さんと爺さんの霊を目の当たりにした。

婆さん「明…・…もうお別れだ。お前にはつらい思いをさせて済まなかったな」

早池峰「じょ冗談じゃねえぞ。今までさんざん人のケツたたいて、それはねえぜ…・…」

早池峰は栗果の手を強く引いて、こう言い放った。

早池峰「俺はこいつと結婚する！そして美雀会三代目襲名だ！！それまでくたばるんじゃねーよ！！」

あかね「え` ~っ！！」

婆さん「ふ…・…どこまでも天邪鬼あまのじゃくな奴だのう」

死神「さあ、もういいですか？」



爺さん「さらばじゃ、ポーズ」

爺さんと婆さんは、若い頃の姿に戻り、天へ消えていった…・…。お別れだ。

あかね「やれやれ 50年越しの恋が実ったとゆー訳か」

死神の今回の用事は、婆さんのことだった。しかし、話は終わっていなかった。

死神「あ…言い忘れましたが…まだこの世に留まっている織田勇二さん、姫神あかねさん…早池峰明さんの 3 名の魂は…3 日後の午前零時にお迎えにあがりますので、ヨロシク！」

衝撃を受ける 3 人。

そうだ。なんとか 2 年も生きながらえてきたが、そもそもそれは特例措置だ。未練も解消されたし、肉体が残っていたからといって、元のように生き返って万々歳なんてことがルールの許されるはずがない。それは、この漫画もついに終わりを迎えようとしているということでもある…。